

追悼文

追悼 八巻重雄先生 肺生検診断に捧げた熱き情熱

八巻重雄先生は昭和 39 年東北大学医学部に入学し、私の 1 年後輩で医学部ボート部の仲間であった。昭和 42 年のクルーは Cox 斉藤 (5 年生)、Stroke 中島(4)、3 番八巻(4)、2 番渡部(5)、Bow 黒澤(5)で、医学部ボート部史上最強といわれ、武藤杯、東医体、全医体にすべて優勝した。ボートに魚が飛び込むと優勝するというジンクスがあり、松島湾での練習中に 4 匹のトビウオが飛び込んだので 4 勝目を狙って医学部クルーとしては初出場となる全日本大学ナックル選手権に出場し、ここでも優勝した。思い切り体を伸ばして力強くオールを引き切る八巻先生の勇姿が臉に浮かぶ。ジンクスに賭けた青春の最高の思い出である。

八巻先生のテナーサックスはプロ跌で、高校時代に医者になるかテナー奏者になるか真剣に悩んだほどである。学会懇親会などでたびたび華麗な演奏を披露してくれた。

昭和 45 年に卒業し、船医として欧州を廻った後胸部外科に入局したが、情熱の塊であった先生が乾坤一擲の力を傾注したのは肺生検診断法の確立である。TGA の肺高血圧発生機序に興味を持った先生は 1974 年諏訪紀夫教授の指導で肺高血圧病理の研究を始め、Circulation (1976, 1980) に発表した Index of pulmonary vascular disease (IPVD) はその後重要な役割を果たすことになる。1979 年この分野の世界的権威であった Amsterdam 大学病理学教室の Wagenvoort 教授のもとに留学し、「八巻の法則」を確立し、その成果は American Journal of Pathology (1981) や British Heart Journal (1985) などに発表された。偶然、私も先天性心疾患の刺激伝導系を研究するため Amsterdam 大学病理学教室の Becker 教授のもとに留学し、八巻一家と同じ Beethoven 通りの築 100 年のアパートに住み、研究室でも隣り合わせで、家族共々実によく笑りの多い Amsterdam 生活を送ることができ、両家の素晴らしい思い出になった。

帰国後、先生は全国から送られてくる肺生検標本の分析、評価を精力的に進め、公立刈田総合病院を経て、2002 年白石市にやまきクリニックを開院し、診療所内に日本肺血管研究所を創設した。先生の温かい人柄と素晴らしい家族の支えで地元の皆さんからとても信頼され、愛されるクリニックになった。

先生はまた大のゴルフ好きで、小児心臓外科医の集まりである小心会の常連メンバーとして宮里家を応援し、仙



イタリア・ミラノで愛妻尚美さんと

台の学校に通っていた藍ちゃんと優作君のために「やまきクリニック宮里杯」を開いて二人を励ましていた。

先生は朝4時に起床し、診療前に日本肺血管研究所で全国から送られてくる肺生検病理組織標本の検鏡—評価—診断書作成を黙々と続け、研究と臨床を見事に両立させていた。その業績は東北大学医学部奨励賞銀賞（1977年）、国際胸部医学会日本支部賞（1981年）に続いて、年に一人学問的に優れた業績をあげた研究者に贈られる東北大学医学部の高橋賞（2004年）を受賞するところとなり、長年の夢であった教科書「臨床家のための肺血管病変肺生検診断」（メヂカルレビュー社，2000年）も出版した。

余人の及ばない八巻先生の業績は愛妻尚美さんの献身的支え抜きにはなし得なかった。病氣療養中も尚美さんに沖縄の海を見せたい、New York のクリスマスを見せたいと出かけていた。心から感謝していたのだろう。

2,000例を超える肺生検診断は重症肺高血圧合併患児の心臓手術適応決定に迷う全国の小児循環器医、小児心臓外科医の力強い味方であったが、先生の最終目標は肺生検診断により手術を受けることができた子どもたちの長期遠隔成績を詳細に検討し、手術適応基準をさらに厳密にすることであった。Circulation Journal Awards for the Year 2014に輝いた論文（Circ J 2014; 78: 476-482）はこの最終目標に向けた第一歩であり、“八巻の肺生検法”が金字塔を打ち立てた瞬間である。しかし2015年4月の循環器学会総会での受賞記念講演を目前にした2014年11月28日、愛する家族に見守られてその充実した生涯を閉じた。

遺作となった“肺高血圧症病理のパラダイムシフトとその臨床応用”（文芸春秋企画出版，2015年）は先生の研究を理解する上で必須のkeynoteである。後輩が研究を引き継ぎ、患児がよりの確な治療を受けられるようになれば、先生はあの満面の笑みを浮かべて天国でクラブを振り、テナーサックスを吹いているにちがいない。

実に見事な人生であった。

榊原サピアタワークリニック名誉院長
黒澤 博身